

ドイツを旅して感じたこと

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

今月初旬、ハンブルグを訪れた。初めてのドイツ旅行であったが、良き仲間恵まれ、旬のホワイトアスパラガスを食しながら、季節の変わり目の欧州の空気を十分に吸い込んだ。

港町ハンブルグは旧市街地と、運河沿いの再開発地域が上手に同席する完成された観光地である。そこで、ふと気付いたのが、断片的に存在する古い教会などの歴史的建造物以外の地域が、パリやロンドンに比べ、格段に新しいことであった。

その理由を、東京同様、第2次世界大戦でハンブルグは中核都市として、アメリカ・イギリス連合軍隊に徹底的な空襲を受け、廃墟の街から復興が始まったところにあると聞き、何とも物悲しい気持ちとなった。

帰国直後、皇居の傍、明治生命館地下レストランにおける会食に参加した。昭和9年に建てられた建造物であり、趣のある洋館が創業以来の姿で残されている。

昭和9年は、紛れもなく戦前である。そして、戦時中には、あえて、その場所の空爆は避けられ、戦後しばらくの間は進駐軍の娯楽施設として有効利用されていたわけだ。その場所が、3日前に眺めていたハンブルグの教会付近の生き残り景色とだぶった。

そして終戦から74年が経過した令和時代。最初の国賓として、米国・トランプ大統領を迎えた。僅かな滞在期間中、ゴルフに大相撲、炉端焼き、天皇

皇后両陛下との会談から軍事視察までの行程。ここまでの完璧な接待を喜ばない人間はいないはずだ。

とはいえ、この素晴らしい外交劇に一抹の不安を感じざるを得ないところもある。

今後、安倍晋三総理は任期満了まで職責を果たすであろうが、トランプ大統領は、来年、嫌でも選挙のハードルを越えなければならぬわけだ。

どうやら現在のところ、米国内でトランプ氏に対する有力な対抗馬が存在しないようだが、実際、ここまでの「抱きつき外交」を大成させた後、トランプ氏以外の反トランプ候補が選出された際のシナリオも政府は描いているのであろうか。違う人が大統領になったら、日本は嫌われてしまうかもしれない。

ドイツのスタンスは違うようだ。旧東ドイツ出身のメルケル首相が、今年のハーバード大学卒業式の記念講演で、私生活を語り、トランプ大統領の政策を堂々と批判し、拍手喝采を浴びた。かつての同盟国が随分と違う方向に向いている感を覚えた。

以下は不規則発言かもしれないが、日本維新の会・若手議員が「北方領土を戦争で取り返せ」と発言し、与野党問わずに大ブーイングを受けている。馬鹿な奴だと自分も思ったが、その後馬鹿な舞いを見ると、本人は、まずいことを言ったなどと微塵にも思っていない。

い節がある。

そこで言葉には発しないが（文書に残すほうが罪悪だが）、地味で堅実で素直な人柄で、自動車や電車を始めとする精密機械の製造・販売で世界を席巻する日独には共通点が多い。日本は平和な形でドイツと連携しながら、反保護主義、反自国中心主義の原則を再確認するべきであろう。それでも、英語圏との競争に勝てばよかったなあと思う日本人とドイツ人は、自分以外にも結構いるのでは。

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してパセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/> 名古屋甲状腺診療所（名古屋分院） <http://www.kojin-kai.jp/nagoya/> さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院） <http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

